

二〇二四年一月十八日(参加者二名)

水底にたゆたふ影は木の葉舟	菜々
もみぢ影池面の波に失せにけり	"
筆洗池へ散りこむ紅葉かな	"
梢洩る日の斑踏む落葉道	"
茶室へと誘ふ小径石踏黄なり	満天
秋天へ蘭亭の簷反りに反る	"
山門を額縁として庭黄葉	"
フレームの天井過ぎる雲白し	"
おにぎりをはほばるベンチ冬日燦	はく子
お茶室へもみぢ且つ散る石畳	"
奥池へ鹿垣通りぬけもして	"
盤座に双手の願い冬帽子	よう子
小流れに桜紅葉の色をどる	"
甌岩割れんばかりに百舌啼る	"
印刻の残る巨岩や鴟高音	よし子
古りし句碑撃ちて刎ねたる木の実かな	"
安産の祈願の絵馬に小鳥来る	"
冬ざれやトタン屋根なる能舞台	うつぎ

バス降りる人待ち構へるのこづち	"
盤座の裂けよとばかり鴟高音	"
飛び交ひて鶉騒がしき甌岩	有香
小春日や岩のパワーを掌に	"
由緒書読む間も落葉降りやまず	"
翅広げ微動だにせぬ冬の蝶	ぼんこ
風騒ぐ木々の秀つ枝や冬山路	"
細波に紅葉影消ゆ池鏡	"
紅葉山撫でゆく雲の影法師	わかば
蘭亭の飛簷掠めて黄葉散る	"

定例句会みの選

二〇二四年一月十八日(参加者二名)